

奥おくの細道ほそみち
旅立たびだち
松尾芭蕉まつお ばしやう

つきひ はくだい かきやく
月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。
しやうがい
舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者
こじん
は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せ
へんうん
るあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂
はく おもい
白の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破
かいひん
屋おくにくもの古巢を払はらひて、やや年も暮れ、春立てるかす
はらい
みの空に、白河しらかわの関越こえむと、そぞろ神の物につきて心
ん

を狂くるはせ、道祖神どうそじんの招まねきに会あひて、取とるもの手てにつかず。
もも引ひきの破やぶれをつづり、かきお(を)の緒お付け替かへて、三里きりうに灸きりう
据すうるより、松島まつしまの月つきまづ心こころにかかりて、住すめるかたは
人ひとに譲ゆづりて、杉風すぎふうが別墅べつしょに移うつるに、

草くさの戸とも住すみ替かはる代よぞひなの家いえ

面おもて八句はっくを庵いおりの柱はしらに懸かけ置く。